

# 茅田砂胡 全仕事1993-2013

茅田砂胡

*Sunako Kayata*

## 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の29頁分を収録したものです。

### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

## 双子と三つ子のお留守番……………440

桐原家の人々番外篇

イラスト：成瀬かおり

コミック

## 特別な一日……………478

桐原家の人々コミック番外篇

成瀬かおり

## 司令官就任！……………504

祝もものき事務所番外篇

イラスト：睦月ムンク

コミック

## 鳳華のとある一日……………526

祝もものき事務所コミック番外篇

百之喜と鳳華が『最悪の出会い』（『祝もものき事務所3』収録）より

睦月ムンク

## ロングインタビュー……………570

～作家生活20年の軌跡を語る～

## 刊行リスト……………579

## メッセージ……………694

沖麻実也／鈴木理華／成瀬かおり／睦月ムンク／草河遊也

## あとがき……………700

**紅蓮の夢**……………6

デルフィニア戦記／スカーレット・ウィザード／暁の天使たち／  
クラッシュ・ブレイズ／天使たちの課外活動／トゥルークの海賊 より

イラスト：沖麻実也／鈴木理華

コミック

Delfinian Another

**ヴァンツァーの櫛**……………376

沖麻実也 原案：茅田砂胡

コミック

**かすがいの実**……………404

天使たちの課外活動／トゥルークの海賊コミック番外篇

鈴木理華

**レディ・ガンナー外伝**……………582

けむけむ大作戦

イラスト：草河遊也

【スペシャル鼎談】

ドラマを奏でる

〈茅田ワールド〉の音楽ができるまで……………544

安藤岳（プロデューサー）／砂守岳央（脚本・作曲）／松岡美弥子（作曲）

コミック

**【全仕事】 ができるまで**……………552

BGM／ドラマCD収録見学記

鈴木理華

ドラマCD「紅蓮の夢」

トラックリスト……………567 / 全制作者リスト……………569

## ご挨拶

1993年10月25日『放浪の戦士』が刊行され、「デルフィニア戦記」シリーズは始まりました。

それから二十年余——

C★NOVELSファンタジアの歴史と共に走り続けてきた茅田砂胡氏の作品集をお届けいたします。

長・中・短篇の書きおろし小説に、各シリーズを飾るイラストレーター諸氏によるコミックや、著者インタビューなど「ここまでの歴史」を詰めこめるだけ詰めこんだ極厚本です。

お楽しみいただければ幸いです。

また次の二十年も新しい道を共に走り続けられることを祈り、茅田氏の新たなる第一歩をご愛読くださいます皆さまと踏み出せることを喜びつつ、より一層の応援をいただけますようお願い申し上げます。

2013年11月

C★NOVELS編集部

茅田砂胡  
全仕事  
1993  
2013



# 紅蓮の夢

デルフィニア戦記／スカーレット・ウィザード  
暁の天使たち／クラッシュ・ユングレイズ  
天使たちの課外活動／トゥルーク・の海賊より

イラスト

沖麻実也  
鈴木理華

最初に異変に気づいたのは航海士だった。

「船長、高度が上がっていません」

「何？」

豪華客船《セント・サフィニア号》は現在、海拔三千メートル、時速八十キロで自動航行中だった。

進路前方には七千メートル級の巨峰が連なるゴア山脈がそびえ立っている。この状況で、上昇しない選択肢はあり得ない。

「管制頭脳を確認しろ」

「表示すべて一致。上昇を示していますが——高度

計は依然海拔三千のままです！」

「高度計が正常です。本船は上昇していません！」

船橋の雰囲気が一気に緊迫した。

船は上昇していると管制頭脳は認識しているのに

実際には高度が上がっていない。

「手動操縦に切り替え、予定の航路に乗せろ！」

と船長は命じた。

《セント・サフィニア号》は惑星ジラードの雄大にして魅力的な大自然を数日——時には数週間掛けて堪能する周遊船旅行のための大気圏内限定船だ。

海拔三千メートルという低い空を飛んでいるのも時速八十キロという超低速度も、景色をゆつたりと楽しむためのものだった。共和宇宙でも滅多にない『宇宙を飛ばない』豪華客船なのである。

「了解。手動操縦に切り替えます」

復唱した一等操縦士がその作業に入ろうとして、今度こそ顔色を変えた。

「——手動に切り替わりません！」

「何だと?!」

進路変更を試みるも舵が効かない。

不時着しようにも高度が下げられない。

船橋も機関部も蒼白になった。

機関長は故障箇所を特定しようと思死になったが、悠長に探している暇はなかった。

直進を続けたら一時間足らずでゴア山脈の中心を為す巨峰、ホルスト山に正面衝突してしまう。

ホルスト山は標高七千五百メートル。

まともに山肌に突っ込んだらこの巨船といえども木っ端微塵に大破するのは必至である。

この船には乗客だけでも五百人あまり、乗務員を含めると千人近い人間が乗っている。乗務員の数が多いのは『空飛ぶ宮殿』とまで呼ばれる《セント・サフィニア号》ならではのことで、最高級の接待を提供するための職員が少なからずいるのだ。

高度三千メートルの上空でこれだけの人数を避難させなくてはならない。大仕事だったが、不幸中の幸いだったのは、避難するための時間も手段もまだ充分にあったことだ。

船長は努めて冷静な態度と口調で船内一斉放送で乗客に避難を呼びかけたのである。

「乗客の皆さまにお知らせ致します。本船の航行に支障が生じる事態となりました。ただちに乗務員の

指示に従い、最寄りの避難艇にお急ぎください」

この時、《セント・サフィニア号》は周遊船旅行二日目の昼を迎えたばかりだった。

五百人の乗客は展望デッキから景色を眺めたり、空中で泳ぐ気分を味わえる船底プールで泳いだり、娯楽室で楽しんだりと、思い思いにくつろいでいた。そこに突然の避難指示である。

「なあに、これ？ 避難訓練なの？」

「この船で？ そんな話は聞いてないぞ」

一様にざわついた。本気にしない者も多かったが、乗務員に避難が必要だと促され、首を捻りながらも、ぞろぞろと一番近い避難艇へ向かった。

そんな乗客の中に惑星ベルトランのコーデリア・プレイス州知事のヴァレンティン卿がいた。

夫人のマーガレットも、四人の子どもたちのうち長女のドミューシア、次女のデイジー・ローズ、次男のチェイニーも一緒だった。学校が長期の休みに入ったので家族旅行でジラードを訪れていたのだ。



長男は学校の都合で一人遅れ、この後の寄港地で家族と合流する予定になっている。

ヴァレンタイン一家は船底プールで泳ごうとして船の下層に向かっているところだった。

デイジー・ローズが母親を見上げて問いかけた。「いったんお部屋に戻ってもいい？」

母親より先にドミューシアが答える。

「だめよ。荷物は持っていけないの」

州知事の娘として人の範となる行動をしなくてはならないとドミューシアにはわかっていたが、まだ九歳のデイジー・ローズにはそれは難しい。懸命に母親に訴えた。

「髪飾りを一個、取ってくるだけだから！ お願い、お気に入りなの！」

マーガレットは優しく末の娘をなだめた。

「デイジー、みんながそうやってお部屋に戻ったら、避難に時間が掛かるでしょう。ドミの言うとおりに。こういう時は何も持たずに避難するの」

一方、十二歳のチェイニーは逆に顔を輝かせた。豪華客船の旅もいいが、突発事態のほうがもっとおもしろいと感じる年頃である。

避難艇で下船するなんて経験は普通はできない。チェイニーは真つ先に駆け出して乗務員の案内を待たずに格納庫扉に飛びついた。

記してある開け方の手順通りに、嬉々として扉を開放しようとして、不思議そうに振り返る。

「変だな？ 開かないよ」

「扉が重いのかな。代わりなさい」

ヴァレンタイン卿が進み出た。

避難艇の格納庫扉は普段は施錠されていて乗客は入れないようになっていたが、緊急時には自動的に解錠されて手動で開けられるようになるはずだった。乗船時にそう説明を受けたが、卿が力を籠めても扉はびくともしない。

他の客も続々とやってきて格納庫扉を開けようとしているが、やはり同じだ。どの扉も開かない。

中には乗務員を捕まえて詰問する客もいた。

「きみ！ どうなってるんだね？」

しかし、訊かれた乗務員にも答えようがない。

そこに第二の船内放送があった。

「まもなくジラードの救援船が到着します。乗客の皆さまにはそちらに乗り移っていただきます。乗務員の指示に従い、展望デッキまでお越しくください」

これを聞いたヴァレンタイン卿は驚いた。

「展望デッキから救援船に乗り移らせる気か？」

マーガレットもちよっぴり不安そうに言った。

「まあ、お年寄りには厳しいのじゃないかしら」

それというのも現在この船は高度三千メートルを航行中なのである。

展望デッキには透明で巨大な天蓋がある。これがあることによって乗客は快適な環境で雄大な景色を楽しめるのだが、救助船が接舷するためには、一度天蓋を外さなくてはならない。

しかし、外したら最後、真冬のような低温と薄い

空気が一気に乗客に襲いかかる。

その状況で、乗客は甲板を自分の足で突っ切って、救助船まで行かなくてはならない。

そのため、救援船の到着を待つ間、もともと展望デッキにいた乗客も通路の中に戻され、他の乗客も出口付近の通路で待機することになった。

「いったい何があったんだ？ 説明もないのか」

不満そうに話す男性客もいれば、事態がわからず、きよとんとしている子どもたちもいる。

はしゃいで通路を走り回る小さい子もいる。

緊張感も危機感も感じられないが、無理もない。

この時点ではまだ誰もそれほどの緊急事態だとは感じていなかったからだ。

むしろ、始まったばかりの豪華客船の旅をこんな中途半端な形で終わらせられることにながっかりして、不満に感じていたくらいだ。

左舷の通路の窓から外を眺めても、空は青く晴れ、悠々と雲が流れ、《セント・サフィニア号》は未だ

巨大な空飛ぶ宮殿として君臨しているように見える。

だが、その頃、船橋では大問題が発生していた。

乗客には伏せていたが、船内に設置された避難艇のすべての格納庫扉が開かなかつたのだ。

これだけでも大問題だが、救助船が来てくれれば何とかなる。しかし、千人もの人間を他の船に移乗させるのはただでさえ時間が掛かる。

何よりも、その時間が問題だった。

ひっきりなしに「急いでくれ！」と要請を続け、

救助船から待ちかねた連絡が入った。

「まもなく到着する。展望デッキを開放して接舷に備えてくれ」

「了解！」

歓喜の声を上げて天蓋を開放しようとしたところ、これまた作動しないのだ。

「どうなっている!?!」

船長が血相を変えて叫ぶ。

同時に機関部から悲鳴のような報告が入った。

「永久内燃機関が——過剰運転です！」

「何だと!?!」

この船は大気圏内限定型にも拘わらず永久内燃機関を搭載している。これを積むと燃料を補給せずに飛行を続けられるのが最大の利点なのだ。

それでいながら宇宙船ではないので、感応頭脳は搭載していない。管制頭脳で永久内燃機関と船体の制御をしている珍しい形式の船だった。

「強制停止を掛ける！」

船長が叫んだ折も折だった。

巨大な船体に、ずしんと異様な衝撃が走った。

過剰に供給された動力が非常弁を押し破って排出されたためだった。しかも一度ではすまない。立て続けに振動が続き、立っていられないほどの揺れが乗客を襲ったのである。

「うわっ！」

「きゃあっ！」

「マーガレット！」

双子と  
三つ子の番  
お留守

桐原家の人々  
番外篇

イラスト  
成瀬かおり



「どうしても日帰りはできないのよ」

心底忌々しそうな憤慨の口調で麻亜子は言った。

「無能な同僚が日程を一週間間違えるなんてポカをやらかしてくれたおかげで、木曜の朝一で現地に飛ばなきやならないの」

「ところが、俺も木曜は出張なんだよ」

零が困ったように言う。

「先方も忙しい人だからね。日程はずらせないんだ。夜には帰れると思うんだけど……ぎりぎりだね」

「あんたたちが夏休みでほんと助かったわ。三人もいるんだから、一日くらい何とかなるでしょ」

流れるようにたたみ掛けてくる姉と兄に桐原眞己、都、猛の三つ子は顔を引きつらせながら抗議した。

「無理無理！ 絶対無理だって！」

「そうよ！ そんなこと勝手に決めないで！ 何かあったらどうするのよ！」

「俺たちに子守なんかできるわけないじゃん！」

あいにく桐原麻亜子という人はこんなことで引き下がるようなぬるい女性ではない。

「何が無理なの。あんたたち、あの子たちに何度もミルクやってるし、おむつも替えられるし、遊んでやってるでしょ？ それだけでできれば十分よ」

零が真顔で補足した。

「いいや、もう一つある。絶対に眼を離さないこと。ちよつと眼を離れた隙に玄関へ這っていつて土間に転がり落ちたりしたら、それこそ洒落にならない」

三人はぞつと震え上がった。

桐原麻亜子は年の離れた彼らの姉である。

一昨年、それまで兄だと思っていた零と結婚して、去年の秋に男女の双子を出産した。

三つ子にとっては甥と姪の誕生である。

(少なくとも表向きはそういうことになっている)

それ以来、麻亜子と零は月に一度か二度、週末に双子を連れて実家に遊びに来るようになった。

小さな子を二人も連れての移動は大変だろうに、頻繁ひんぱんに実家にやって来るのは、母の豊ゆたかと祖母の締ていに赤ん坊を会わせるためだ。

母は初孫ひまきに、祖母は初曾孫ひまきに（表向きはそういうことになっている）夢中で眼を細めている。

父の広美ひろみは海外に単身赴任中なので零と麻亜子は父には写真と動画を送っているらしい。

桐原家は家族の結束が強く、『立っているものは親でも使え』という家訓の家だから、高校三年生の手を六本も（？）遊ばせておくわけがないのだ。

豊も締も「覚えておいて損はないよ」と言っ、おむつのたたみ方や当て方を三つ子に教え込んだ。

麻亜子は今時珍しい布おむつを使っている。

『そのほうがゴミが出ない』のだそうだ。

男の子と女の子ではおむつの当て方が違うことを三つ子はこの時知った。さらには、うんちのついたおむつの処理まで一通りやらされた。

いろいろと衝撃だったが、彼らにとっても双子の

成長は新鮮で、会うたびに眼を見張っていた。

「あ！ 寝返った」

「へえ、ずいぶん手が動くようになったなあ」

「うわ！ 這ってる這ってる！」

そして月日は流れ、もうじき八月だ。

双子は十ヶ月になっている。

だからこそ、この急場に役に立て！ と麻亜子と零は言うわけだが、高校生の彼ら三人だけで面倒を見るとなると責任の度合いが段違いだ。

「俺たち、受験生だぜ！」

「だから？」

伝家の宝刀を抜いたはずが、びくともしない。

これは麻亜子の主義というより『桐原家』流だ。

返す言葉のなくなった都はそつと囁ささやいた。

「こういうのって……育児放棄って言わないか？」

「……それを言うなら保護責任者遺棄じゃない？」

同じく小声で猛が言い返す。何故なぜ小声かといえは、

声を大にして言う勇氣はないからだ。

眞己は眞己で懸命に訴えた。

「素人に任せるなんて危ないよ。零ちゃんが夜には帰れるなら保育園に預けて、ベビーシッターさんにお迎えを頼んだら？」

零は麻亜子が双子を妊娠したとわかった頃から、設計の仕事を少しずつ在宅に切り替えていた。

麻亜子は大手アパレル会社に勤務している。

フットワークの軽さが求められる部署にいる上、責任ある立場でもあったので、退職はおろか時短もできなかつたのだ。もちろん、本人も仕事を辞めるつもりなどさらさらなかつた。

それでも双子が六ヶ月になるまでは育休を取って零とともに都内の自宅で子育てに励んでいた。

その間も時々ベビーシッターを頼んでいることを二人が呉里六郷の家に来た際、何かの話題に出して三つ子は不思議に思つて尋ねたことがある。

「今は零ちゃんも麻亜子さんも家にいるのに、何でベビーシッターを雇うんだ？」

麻亜子は『そこへ直れ』と言わんばかりの視線を三人にくれたものだ。

「敵は二人。こっちも二人よ。誰が大量のおむつを洗つて御飯をつくつて買い物に行つて役所の用事を済ませて洗濯と掃除をするの？」

双子がいるとその程度のこともできないのかと、三人はちよつぱり疑問に思ったが、口にはしない。火に油を注ぐ結果になるだけだからだ。

麻亜子は仕事に復帰すると同時に双子を保育園に入れた。ではシッターさんもお役御免かと思いきや、お願いする頻度はむしろ逆に増えたという。

「保育園は病気の子は預かつてくれないのよ。他の子に移るでしょ。かといって零一人で双子の面倒を見られるわけがない。あたしいやよ。家に帰ったら零が過労で倒れてて双子が泣き叫んでるのなんて」「さすがに一日では倒れないと思うよ」

色白の優しげな顔で、兄は微笑した。

「俺、体力は人並みにあるつもりだけど、あくまで

人並みだからね」

「あたしだって飛鳥さんみたいにはいかないわよ」

麻亜子が絶大な信頼を置いているシッターさんは飛鳥さんというそうだと。

「この月齢の双子の世話を一人でこなせるんだから信じられないわよ。あれはもう人間業じゃないわ。

超人よ！ 彼女なら安心して任せられるんだけど、あいにくずっと前から八月の第一週はお休みさせていただきますって言われちゃってるの」

飛鳥さんのご両親が結婚四十周年を迎えるので、記念に海外旅行をプレゼントし、ご両親の希望で、飛鳥さんも付き添って一緒に行くのだという。

三つ子はそれでも食い下がった。

「で、でもさ、飛鳥さんじゃなくなつて、今までも他の人が来たことがあったんじゃない？」

「条件でだめ」

三人は意味がわからず首を傾げ、零が説明した。

「俺の出張先が京都なんだよ」

「——で、あたしが北海道。シッター協会の規定で原則的に泊まりでは預かれないことになってるのよ。緊急時に保護者がすぐ駆けつけられない遠方にいる場合も同じくNG。あたしはどう頑張っても木曜のうちには戻れない」

「俺も打ち合わせだけで終われば問題ないんだけど、こればかりは先方を優先しないといけないからね。ここをちよつとこう変更して——なんて言われたら、どのくらい時間が掛かるかわからない。何時までに必ず帰れますとは言えないんだよ」

「遅れたら結果的にシッターさんに迷惑が掛かる。そんな無責任なことではできないわ」

土俵際まで押されながら三人はまだ踏ん張った。

「他の協会のシッターさんは？」

「今から探せつて？ あんたもすごいこと言うわね。お金に糸目をつけなければ、奇跡的に一人くらいは見つかるかもしれないけど……」

「まず不可能だと思ったほうがいい」



麻亜子も零も達観した様子である。

「飛鳥さん級の超人でもない限り、一人で十ヶ月の双子の面倒なんか絶対に見られない。今から二人のシッターさんを確保するのはどう考えても無理よ。

この辺りなら逆に何とかなるかもしれないけど」

麻亜子の実家で三人が今も暮らしている桐原家は関東の田舎町、呉里六郷に建っている。

「——今、都心の育児事情って洒落にならないのよ。認可の保育園に入れるのがどれだけ大変か、優秀なシッターさんの争奪戦がどれだけ熾烈を極めてるか、あんたたち知ってるの？」

知りません。

三人の心の声を無視して麻亜子は肩をすくめた。

「第一、あたしも零もないのに、うちの子たちと初対面の人には任せられないわ」

「同感。——特に、しーちゃんはちよつと人見知りだからね」

「こんな時に限って母さんは父さんとバカンスだし、

お祖母ちゃんは老人会の旅行だっていうし、ほんと、どうしようかと思っただけど……」

麻亜子がにっこり笑い、零も嬉しそうに三つ子を見つめて微笑した。

「よかったよ。この仕事はどうしても抜けるわけにいかなくてね」

「こつちも同様よ。もちろんシッター代は出すわ。

二人に御飯食べさせて、おむつ替えてミルクやって昼寝させればいいのよ。たった一日だけなんだから楽なバイトでしょ？」

ちつとも楽じゃない！ という三人の心の悲鳴を麻亜子はきらりと光る眼差し一つで封じ込めた。

「あんたたち小学生？ 幼稚園児？ 違うでしょ？ 高校三年生にもなつて子守の一つもできないの」

普通はできないってば！

三人は声を大にして言いたかったが、悲しいかな、この姉に逆らつても無駄だということだけは長年の経験でいやというほどわかつていたのである。

# 司 令 官 就 任 ！

祝 も も の き 事 務 所 番 外 篇



イラスト

睦 月 ム ン ク

百之喜太郎もものきたろうの家が人手に渡ったことは、何よりも幼なじみの三人を刺激したらしい。

「俊介！ おまえ弁護士のかせに何やってた！」

鬼光智也おにみつともやは顔を真っ赤にして怒鳴りつけてきた。

芳猿梓よしざるあずまは彼には珍しくじっとり非難の籠もった

眼差しで雉名俊介を睨みつけている。犬槿蓮翔いぬまきれんしょうは肩をすくめ、揶揄やゆするような笑顔で言ってきた。

「俊くんもたいしたことないね」

顔は笑っているが、眼は笑っていない。しかも、声が恐ろしく冷やかだ。

これは恐い。犬槿の本気の顔である。

雉名俊介にはいい迷惑以外の何物でもなかった。

二十五歳の若さで眉間に刻まれた皺しわが固定化してしまいいそうだ。その皺を親指で解ほしながら、雉名は根気よく、ねばり強く、幼なじみたちに言い論ごんした。「勘違いするな。光圀みつくにさんは不当な手段であの家を

手に入れたわけじゃない。故人の遺志なんだぞ」

故百之喜百千代ももちよは長年の友人である光圀八千代やちよに、家を譲ると遺言状に残したのだ。

遺言状は絶対的な故人の遺志で、弁護士の雉名はそれに従わなくてはならない義務がある。

そもそも他人の自分たちに百千代の決定に文句を言う資格も権限もない。

それでも三人は納得できなかった。

彼らが知りたいのは、百千代がなぜたった一人の孫の太郎ではなく友人に長年住み慣れた家、しかも結構な広さのある家を譲るなどと言いつ出したのかだ。何事にも率直な鬼光が指摘する。

「おかしいじゃないか。いくら長年の親友でも普通、赤の他人に家を相続させたりするか？」

それは雉名も声を大にして言いたいところだ。

自らの不甲斐ふかなさを感じて雉名が沈黙していると、鬼光はさらに突っ込んできた。

「これはおまえの専門だから訊くけど、孫の太郎が

相続する場合は家の相続税はたいしたことなくても、血縁者じゃない場合はどうなるんだ。税金だけでもすごい額になるんじゃないか？」

「相続税と贈与税は計算法が違う。それに土地ならともかく、あの家屋にそこまでの資産価値はない」

光圀八千代が相続したのは築数十年の日本家屋だ。

延べ床面積は百坪以上の大邸宅だが、立派な中古物件である。資産価値があるのは土地のほうだ。

二十三区内の一等地に百数十坪の土地はバブルがはじけて久しい現在でもかなりの財産だが、それはちゃんと太郎が相続している。

雉名の説明に犬槓が鋭く突っ込んだ。

「家だけじゃないでしょ。おばあちゃんの着物も骨董品も小父さんたちの遺品もでしょ？」

百之喜の両親は彼が中学生の時に亡くなったが、母親の貴金属、父親の趣味の美術品だけでも相当な額になる。百千代の着物や、代々百之喜家に伝わる骨董品も含めたら資産価値は軽く億を超えるはずだ。

百之喜太郎は結構なお坊ちゃんなのである。

しかも、お坊ちゃんであるだけに騙されやすく、幼なじみの彼らが心配する理由は充分にあるのだ。

悪い人に騙されて身ぐるみ剥がされる——なんて事態にならないように弁護士雉名の主張で、俺は百之喜のいるべきだというのが彼らの主張で、俺は百之喜の子守じゃないぞというのが雉名の言い分である。

「光圀さんは日本でも有数の資産家だからな。その程度の相続税は余裕で払える」

「それじゃあ、太郎はどうなる？」

「名義の変更は百之喜も納得したことだぞ」

無口な芳猿が、ぼそりと口を開いた。

「そこが問題なんじゃないか……」

鬼光も犬槓もおもむろに頷いた。

「俊介、そろそろ白状しろよ」

「何をだ？」

「家の名義はおばあちゃんの親友の光圀さんだけど、実際に管理してる人は違うでしょ」

雉名は片方の眉をちよつとつり上げた。

「百之喜がしゃべったのか？」

「ものすごく恐い人なんだって？」

「太郎の怯え方おびときたら尋常じゃなかったぞ」

光圀八千代なる婦人は百千代の長年の親友だった。

裕福な人で相続税対策のために一肌脱いでくれた。

そこまでは百歩譲るとして、実際に家を管理する

権限を持つているのはその人の姪めいだという。

ここで幼なじみ三人には疑問その二が生じたのだ。

その『姪』はどういう人物なのか？

それを確かめなくては到底安心できなかつた。

今の百之喜は（生まれ育つた実家でありながら）

他人名義になってしまった家に住んでいるのだから。

しかも、百之喜の話によると、彼は家賃も払って

いないという。無論、水道・光熱費も払っていない。

さすがにこれを聞いた時は三人とも頭を抱えた。

「それってさ、法的にはただの居候で、居住権が

ないってことなんじゃないの？」

再び芳猿がぼそりと言った。

「たろくん、いつあの家を追い出されても、文句も

言えないんだね……」

鬼光がばつさりと切つて捨てる。

「その点は太郎も悪い。甲斐性がなさすぎる」

「ともちゃん。たろちゃんにそんなものがあれば

誰も苦労しないって」

犬槿の意見に芳猿が真顔で頷き、雉名はうんざり

しながら三人に抗議した。

「だから光圀さんは百之喜を追い出したりしないと

何度も言ってるだろう……」

「話をそらすな。俺たちが何を言いたいのか本当に

理解できないのか？ 光圀さんは信用できるとして、

その姪はどうなのかと訊いてるんだ」

これまた究極に答えにくい質問である。

雉名は真意を隠すのが得意なほうだと、自分では

思っている。でなければ弁護士など務まらないが、

幼なじみの彼らに言わせると、雉名は比較的感情が

表に出やすい。三人とも姪名に面と向かつて言ったことはないが『あ、俊くん、今不機嫌だな』『何かいいことあったんだな』くらいはすぐにわかる。

もつともこれは、つきあいの長い彼らだからこそわかるのかもしれない。

姪名は自分の表情が読まれていることに気づいていないが、冷静に見せかけていても実は腰が引けていることくらい、三人にはお見通しだ。

「現に光圀さんに連絡して訊いたら、あの家の話は姪にしてくださいって言われたんだぞ」

姪名は驚いて聞き返した。

「——連絡した？ 光圀さんにか？」

「そ。ともちゃんが連絡先調べてくれてね」

「調べるまでもない。普通に検索で適合したんだ」

しかもその適合数たるや半端ではなかった。

日本でも有数の企業グループの会長である。

これほどの重要人物となると、おいそれと本人と連絡は取れない。秘書がすべて遮断してしまう。

「だめもつで百之喜太郎の家のことで話があるって伝えてくださいって秘書に言ったら、すぐに電話に出てくれたんだ」

会話は鬼光が代表で行った。何しろ芳猿はあまり口が回らないし、犬槿の口調はお年寄りには受けが悪かろうと判断したのだ。彼だつてやろうと思えばそれなりにきちんとしゃべれるのだが、今は明るく歯切れのよい鬼光が最適だと犬槿も芳猿も考えた。

「お電話を代わりました。初めまして。光圀です。太郎ちゃんのお友達の方ですか？」

「恐れ入ります。鬼光智也と申します」

このやりとりはスピーカーにして他の二人も横で聞いていた。

百之喜の家に關しては、すべて百千代との約束でやったことで、太郎には生まれ育つた家でこのまま過ごしてもらいたいというのが百千代の願いであり、自分の願いでもあるのだと八千代は諄々と語つた。

「実際の家の管理は姪に任せてありますが、姪にも

「そう言つてありますので、どうかご心配なく」

八千代からしたら鬼光は孫のような年齢だるうに、彼女の口調は穏やかで、至つて丁寧なものだった。

「ありがとうございます。光圀さん」

鬼光はほつとして携帯を耳に当てた姿で一礼した。

今の若者には奇異に映るかもしれないが、これは一昔前の電話で礼を言う時の作法である。

相手に見えなくても、声に気持ちを籠めるために実際に頭を下げるというものだ。古風なやり方だが、鬼光は両親にそう教わつて、今でも守っている。

犬楨も芳猿も胸を撫でおろしたが、後で百之喜と話してみると、八千代の話とだいぶ様子が違う。

「たろちゃん、ぶるつてたよ。その人にいつでも家を追い出してやるつて言われたんだつて？」

鬼光も憤慨して言った。

「あの家を喫茶店にしたいそうじゃないか」

芳猿も頷いた。

「あのおばあさんは嘘は言つてないと思う……けど、

姪つて人はどうなのかな？」

雉名は慎重に答えたのである。

「光圀さんの希望に反することはしないでらう」

当然、こんな答えでは彼らは納得しなかった。

活発な犬楨と正義漢に溢れる鬼光は特にそうだ。

「乗りかかった船だもんね、俺らも一度、その姪ごさんに会つてみようかなつて思つてるんだ」

「そうだな。とにかく相手の真意を確かめないと。法律で手出しできないなら情に訴えよう」

恐ろしいことを言う友人たちに雉名は顔色を変え、反射的に止めたのである。

「それはだめだ」

「何で？」

二人がそう尋ねるのは当然だが——君子危うきに近寄らずだ。

しかし、何がどう『危うき』なのかと訊かれたら、雉名にはそれを表現する言葉がない。

なるべく当たり障りのない……しかし、危機感を

# レディガンナー外伝

けむけむ大作戦

イラスト：草河遊也





一条の朝日が大地を明るく照らし出すと同時に、高い木の枝からいつせいに鳥の群れが飛び立った。

これが街中なら雀の群れだが、今飛び立った鳥はどれも恐ろしく大きかった。全部で五羽いる。

《犬鷲》《大鷲》《角鷹》《白頭鷲》《扇鷲》。

本来同じ地域に生息するはずのない猛禽類たちの視界に映るのは緑豊かな田園風景だった。きれいに刈り取られた牧草地や果樹園も見える。

人家にも近いこんな場所を、これだけ多種多様な大型猛禽類が並んで飛ぶことなど本来ありえない。

上空高く舞い上がった五羽の鳥は、その驚異的な視力で獲物を見つけて出した。

狙われたのは野兎のうさぎでも小鳥でもない。

幼さを残しながらも精悍な顔立ちをした少年だ。

荒れ放題の黒髪を高々と括り、強い光を放つ黒い瞳ひとみで空を見上げて舌打ちする。

「……上からかよ！」

その少年は、端はしに白い布を結んだ棒を持っていた。投降用の白旗のような形だが、白い布はずいぶんひらひらしている。レースの編み物のようだ。

少年はその棒を地面に突き刺し、急いで服を脱ぎ始めた。袖無しの上着、ゆつたりした下履したばき、藁わらで編んだ履き物も脱ぎ捨てて黒い下着一枚の姿になり、最後に髪を括った紐ひもを解く。

豊かな黒髪が少年の肩と背中にはらりと広がった。地面に両手をついた途端、少年の身体がむくりとふくれあがった。

五羽の鳥が地上に迫るわずかの間に、少年の姿は劇的な変貌へんぼうを遂げていた。

真っ黒だった髪は真っ白になり、骨格そのものが人とはまったく異なる形に変化し、全身が真っ白な、淡いブルーの模様を散らした毛皮おおに覆われる。

明らかに大型猫科の体格だった。たった今まで少年だった白い獣めけものがけて真っ先に

襲いかかったのは《犬鷲》だった。

鋭い爪つめに引っかけられただけでも大怪我おおけがをするが、その刹那せつな、白い獣は棒をくわえて横に跳んでいった。

思いがけない跳躍に《犬鷲》の爪が空を切る。

続いて《角鷹》が疾走する獣に攻撃を仕掛けたが、白い獣はぎりぎりまで《角鷹》を引きつけて急激に方向転換することで、この攻撃も躲かわした。

次の《大鷲》が仕掛けるまでわずかに間が空き、白い獣に第二の変化が起きた。

猫科の背中に翼が出現したのである。

白い獣は全力で走りながら、乳白色に輝く大きな翼を力強く羽ばたかせ、空に舞い上がった。

一方的に上から狙われている状態よりはましだが、最初から万全の攻撃態勢だった五羽の猛禽類に対し、後から飛んだ獣は明らかに不利な体勢だった。

この巨体で信じられない旋回性能を發揮はつきし、翼を使つて必死に逃げ回ったが、一對五では限度がある。

「ダムー！ こっちー！」

地上から声が掛かり、白い獣は口にくわえた棒を右手に掴み直した。猫科の手はものを掴めないが、この獣にはそれができる。槍やり投げの要領で思いきり地上めがけて放り投げた。

矢のような勢いで飛んできた棒を受け取ったのは二十歳前後の青年だった。

少し離れたところに十代の少女もいる。

すると、五羽の鳥はいっせいに白い獣から地上の二人に狙いを変更した。

青年も少女もすぐさま脱兎の勢いで逃げ出した。

走りながら、青年が少女に棒を突き出して叫ぶ。

「ちよつとこれ持つて！ 服が脱げない！」

「何で最初から脱いでないのさ！ あたし走るのは苦手なんだよ！」

「アタシだってそうよ！」

こんな必死の形相で全力疾走していなければ品のいい美青年だが、話し言葉はどうもいただけない。

走るのは苦手と言いながら少女は棒を受け取り、

反対の手を革のベストに突つ込むと、振り向きざま上空に向かって立て続けにナイフを擲つた。

迫り来る鳥たちが奇声を発して避ける。

その時、鳥たちは少女の肩や頭を狙つて、まさに上から掴みかかろうという体勢だったのだ。こんな至近距離で刃物を食らつたらただでは済まない。

そこに上空から白い獣が追い討ちを掛けた。

獣が五羽の鳥の相手を一手に引き受けている間に、女言葉の青年は懸命に走りながらチョッキを脱ぎ、襟元のネツカチーフをむしり取ると、仕立てのいいシャツも脱ぎ捨てて上半身裸になった。

その姿で青年が少女から棒を受け取ろうとした時、近くの茂みから獅子が飛び出してきた。

鬣がない。雌の獅子だ。雄に比べると小さいが、間近で見るとその迫力たるや大変なものがある。

獅子は棒を持つている少女に襲いかかろうとした。少女も懸命にナイフを放つて応戦したが、こんな武器では足止めが精一杯で打撃は与えられない。

「ベラ！ 何とかしな！」

「無茶言わないでよ！」

そう言いながらベラと呼ばれた青年も腰に結んだ鞭を取り、獅子の顔を狙つて一振りした。

鋭い風切り音に、獅子も一瞬、怯んで後ずさる。

黒蛇鞭と言われるこの鞭は長さは優に五メートル、使い手の技倆次第で皮膚や肉を切り裂ける強力な武器だが、獅子相手では気休めにしかならない。

しかも、別の茂みから新たに二頭が飛び出した。

二人がかりでも一頭を牽制するのがやっとなのに、三頭はとて無理だ。

その時、早朝の野原に銃声が響き渡つた。

この轟音に、さすがに獅子三頭も狙つた獲物から飛び離れて距離を取る。

激しい車輪の音を響かせて馬車が走つてきた。

屋根がない。速力を重視した二頭立ての馬車だ。

「ケイテイさん！ ベラフォードさん！ 早く！」  
叫んだのは十四、五歳の少女だった。

両手にしっかりと拳銃けんじゆうを握にぎって獅子を狙ねらっているが、婦人が護身用に持つ二十二口径とはわけが違う。

四十四口径リボルバー騎兵隊モデル。

まさしく大砲だ。

少女が獅子たちに銃口を向けて動きを封じる。

その隙に青年の姿が劇的に変化した。

細身だった上半身、特に胸の部分が盛り上がって鳩胸の状態になる。その上半身が見る間に赤や黄色、薔薇色などの色鮮やかな羽毛に覆われたかと思うと、背中に金属光沢に輝く青と緑の大きな翼が出現した。

「最初から化けてるってんだよ、まったく!」

文句を言いながらケイティは青年に棒を押しつけ、青年は背中の翼を使って空に舞い上がった。同時にケイティが馬車に飛び乗り、銃を構えた少女が叫ぶ。

「ニーナ! 出して!」

「は、はい!」

馬車を御しているのは二十歳前後の女性だった。

手綱を一振りして馬車を発進させると、空を飛ぶ

青年の後を追った。

極彩色の青年はまっすぐ南を目差して飛んでいる。すると、東の空から青年と同じような背中に翼を生やした人たちが現れた。その数四人。しかも速い。早朝の空を突っ切って、みるみる青年に迫った。

「隼はやぶさ相手じゃペラが不利だよ!」

ケイティが叫び、拳銃の少女も空を見上げた。

「ダムーさんは!?!」

白い獣はまだ五羽の猛禽類を相手にしている。

極彩色の青年は四人の『鳥の人』と接触する前に急降下した。目的地は湖の畔ほとりに建つ瀟洒な家だ。

屋根に舞い降りた青年は棒と鞭を置き、スリングショットに武器を持ち替えた。威力の強い玩具だが、これで撃ち出すものは鉛玉ではない。

屋根の上に蓄たくわえておいた特製弾だんだ。青年は拔群の視力で東から跳んできた四人に狙いを定め、弾を放った。四人は速度が出すぎていて避けきれない。

もろにスリングショットの弾を食らってしまった。

「わあっ！」

「何だこれ!？」

「べたべたする！」

弾の正体は中身を抜いた卵に泥を詰めたものだ。

命中しても怪我することはないが、泥には松脂まつぎにをたっぷり混ぜてある。羽根に当たれば、べたついて翼を自由に使えない。飛ぶ人には致命的な武器だ。

「ごめんなさいね！ 恨みっこなしよ！」

この間に白い獣も家の屋根に到着した。

しかし、彼の後から五羽の猛禽類も追ってくる。

白い獣は舌打ちしながらスリングショットの弾を擲すんで、こちらは素手で勢いよく投げつけた。

ものすごい豪腕である。五羽は慌あわてて弾を避けて逃げ回り、白い獣は視線を転じて叫んだ。

「ヴェインス！ 森から来るぞ！」

「ひえっ!？」

飛び上がったのは家の前で所在なげに立っていた少年だった。

年頃は拳銃の少女とそう変わらないだろう。

金髪碧眼へきがんの愛らしい容貌ようぼうだが、屋根の上の物騒な雰囲気に居竦すくんでいるのは一目でわかる。

極彩色の青年も最後の一人をスリングショットで狙いながら、足下の棒を少年に向かって放り投げた。

「ほら！ これ持つて！ 手筈てはづ通りにして！」

「うわあああん！」

情けない悲鳴を上げながらも少年は棒を受け取り、

よたよたと走り出したのである。

おおかみ狼の群れが森から飛び出してきた。

全部で五頭。棒を持った少年に気づいた狼たちは即座に少年に狙いを定めて突進した。

足力そくりよくの違いは明白すぎる。すぐに追いつかれて少年が地面に押し倒されるのは必至と思われたが、狼の足下が急に跳ね上がった。

「ぬおっ！」

地面に伏せて網あみが張り巡らされていたのである。最初の一頭が掛かったことで罌わなの存在を知っても、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。